

## ズバ語調査報告 ビクトリア湖東部の失われつつあるバントゥ語の一例

著者	宮本 律子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2000-03
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008359">http://hdl.handle.net/2344/00008359</a>

# スバ語調査報告

## ビクトリア湖東部の失われつつあるバントゥ語の一例

宮本 律子

### はじめに

ユネスコ等の資料によると、世界で現在話されている言語（およそ6500）のうち269語の話し手の数の合計で世界の人口の96%になるとのことである。つまり、残りの大部分の言語はその話し手の数を合計しても世界の人口の一割にも満たない。またM・クラウス (M. Krauss) の推定では、世界の言語は、(1)「瀕死の言語」すなわち、子供が母語として習得しなくなった言語が20~50%、(2)「危機に直面している言語」すなわち、現状のままでは来世紀までに(1)の仲間入りをする可能性のある言語が40~75%、(3)「安泰言語」、将来にわたって存続が確定的である言語が5~10%となっている。つまり、世界の言語の半数近くが21世紀中に消失するであろうし、悲観的に見ると95%の言語が消失してしまう可能性さえあるということである。

容易に想像できるように、アフリカでもこの言語消失が急速に進んでいる。植民地からの独立後、急速な国民国家形成に迫られたアフリカ諸国が多

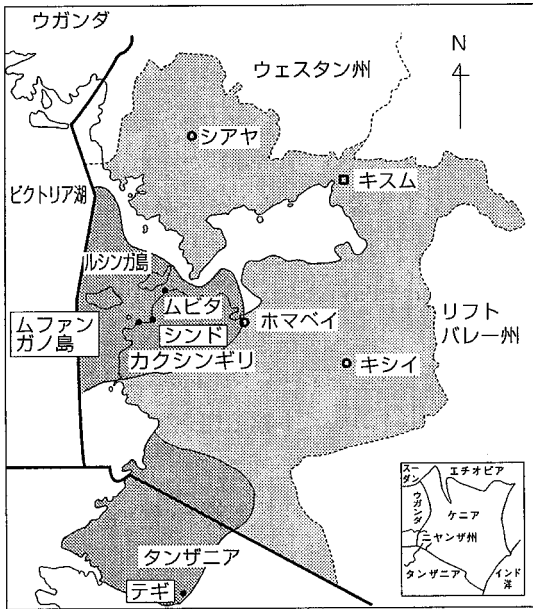
言語的状況をネガティブにとらえ、旧宗主国の言語を中心に開発を進めてきた結果、多数の民族語がなくなりつつある。先の資料によると、アフリカ全体で危機言語 (Endangered languages) が188あるという。アフリカには800から1000の言語があるとされているので、なんとその20~25%が現在失われつつあるのである。

筆者は、1998年からバントゥ諸語の一つであるスバ (Suba) 語の調査を行ってきた。この言語は、上記(1)の「瀕死」のカテゴリーに入る言語である。本報告ではその実態と背景を紹介する。

### 1 スバ語を話す人々、話せない人々

スバ (Suba) 語は、ケニア西部、行政区でいうとニャンザ州南部のビクトリア湖沿岸部とその周辺の島々 (ルシンガ [Rusinga] 島、ムファンガノ [Mfangano] 島およびその他の小さい島々)、そして、その南のタンザニア北西部の一部で話されている。最北部はルシンガ島、最南はタンザニアのテギ (Tegi) あたりになるものと見られる (地図参照)。筆者はこのうち、岸側のシンド (Sindo)

ニャンザ州



(出所) Kenya Primary Atlas.

とムファンガノ島で調査を行なった。

現在、スバという民族単位をケニアもタンザニアも認めていないので、公の資料には、その話者の数などは一切出てこないが、1994年の聖書翻訳協会 (BTL) の調査によると、ケニアにおよそ12万9000人、タンザニアに3万人いるとされる。しかし、ケニア側の実情を見る限りでは、ムファンガノ島を除き、日常的にこの言語を使用している人の数はずっと少ないと思われる。自分がスバ人であると主張する人たちの大部分が、すでに母語としてこの言語を話さなくなっており、70代以上のお年寄りしか話せなくなっているのである。最初にスバ人の祖先が移住してきたと言い伝えに残っているルシンガ島でさえ、ほとんど「絶滅」

の状態である。筆者が行なった99年夏の調査では、スバ語を流暢に話せる人でもっとも若い人が70代後半、最高齢者が自称105歳であった。しかも、この人たちでさえ、若い世代がすでにスバ語を日常的に話せないのに、家の中ではスバ語を使わず、ルオ語 (Luo) を使っていることが多い。ルオ語は、ニャンザ州全体のリングワ・フランカ (地域共通語) になっている。

この地域は、文化的にルオの世界である。ルオ語は、バントゥ系のスバ語とはまったく異なるナイル語族である。民族としてのルオは、およそ200万人いるとされ、ケニア最大の民族キクユ (ギクユ) に並ぶ一大勢力である。ルオ人は20世紀初頭、イギリスによる植民地化以来、新しい状況に積極的に順応し、英語による子供の教育にも熱心で、政治、経済、学術、医学等の分野で主導的な人物を輩出してきた。現在、ナイロビなどの都市部で、政治家や弁護士、大学教授、医師として働く人たちにはルオ人が大変多い。実はこの中には、ルオであると名乗っていても出自はスバである人も少なくない。代表的なのは、ケニア独立時に活躍した著名な政治家、トム・ムボヤ (Tom Mboya) である。頭脳明晰な雄弁家で、初代大統領になったジョモ・ケニヤッタの後継者とも目されたが、政治闘争の中で暗殺された。その独立前後の功績を称えて、ナイロビには彼の名を冠した通りがある。彼はルシンガ島出身で、墓もこの島にあるスバ人であるが、ルオ語しか話さず (スバ語を話せたかどうかは不明)、ケニア人でも彼がスバ人であることを知っている人は少ない。

ほとんどルオ語に飲みこまれてしまったかのようなスバ語が唯一、日常言語としての地位を保っているのは、岸から20キロほどの所にあるムファンガノ島である。地理的に外部の影響を受けにくかったことから、沿岸部よりもルオの影響が少な

く、比較的若い世代まで日常的にスバ語を話している。スバ語残存の今一つの要因は、ここにBTLが入って布教の目的から積極的にスバ語による識字教育を進めていることがある。

## 2 スバの起源

スバ語を話す人々がいつからこの地域に住んでいたのかは、正確な詳細は不明であるが、W・R・オチエン (W. R. Ochieng) の記述に沿って大まかなところをまとめると次のようである。まず、紀元3世紀頃から波状的にビクトリア湖周辺に移動してきたバントゥ諸民族の小さいコミュニティがあり、そこに15世紀頃から現在のスーダン方面からナイル語族のルオが、先住バントゥ民族との衝突や逆に文化的同化などを繰り返しながらゆっくりと時間をかけて移住してきた。こうして18世紀終わりまでに南ニャンザの内陸部までルオが入っていた。それと並行して南ニャンザの島を含む湖の沿岸部には、南 (今のタンザニア方面) からリエニ (Rieny) をはじめとする小バントゥ集団が移り住み、彼らが現在のスバ文化の基礎を築いた。また、18世紀には、ウガンダから覇権争いで逃れてきたバントゥの一派が、ムファンガノ島や岸側のカクシンギリ (Kaksingiri) に移住し定着したという。この二つの流れ、すなわち、南から入ってきたバントゥ諸語を話す人々と北西部から入ってきたガンダ語 (これもバントゥ系) を話す人々の混成が現在のスバ民族の起源であると思われる。実際に、筆者のインタビューでも、祖先は何处から来たのか聞くと、ウガンダあるいはタンザニアと答える人が多数いた。しかし、肝心のスバという言葉が何处からきたものか、スバという民族意識がどのように固まってきたのかは、文献でも調査でもまだ不明である。

## 3 言語とエスニシティ

さて、スバの地域は近代化から取り残されている。世界的な昆虫研究所 (ICRIP) の研究ステーションがあるムビタ (Mbita) から南は、舗装道路も、電気も水道もない。岸から島々までの交通は、ムファンガノまではキスム (Kisumu) やホマベイ (Homa Bay) といった大都市からフェリーが毎日運行しているが、他の島々では、いまだにカヌー状の小さいエンジンボートが生命線である。これらのボートはいつも積載超過状態で、時々転覆して犠牲者を出している。小さい島々では、魚を獲り、ヤギや鶏を育て、穀物を収穫して一見、自給自足が成立するように見えるが、実は、製粉機がなく、せっかくとれた穀物もわざわざ対岸の村まで持って行き、挽いてこなければ食べることができない。製粉機があっても燃料を対岸から運ばなければならない。舗装道路のないカクシンギリ地域では、雨季には道路が泥沼と化して交通機関がストップしてしまい、何十キロも徒歩で移動しなければならない。

このように自分たちの地域が開発から取り残されているのは、現モイ政権の、スバ人ひいてはバントゥ系民族に対する民族差別であるという強い意識を持つ知識人が少なからずいて、5年ほど前に、スバ出身の有力政治家が中心になって運動をし、スバ行政区 (Suba District) が誕生した。ムビタに行政機関が置かれている。しかし、念願の行政区ができたにもかかわらず、一向にインフラは改善されない。人々の不満は鬱積するばかりである。スバ人であることを公表せずルオと名乗っている都会の知識人 (いわば「隠れスバ」) の典型ともいえるスバ出身政治家にとっては、スバ人であることを前面に出し強硬な民族主義者であると

いうレッテルを貼られるのを恐れて、スバ地区の開発促進を強く打ち出せないのかもしれない。実際彼らはルオ語しか話せず、ルオ文化で育っているので、祖先はスバと知っていても自身はすでにスバではなくなっているのだから、スバ人代表の意識もないのだろう。それでも、自分たちの行政区を政府に作らせた強い民族意識を持つ人々がいることもまた事実である。筆者の研究の手伝いをしてきたあるスバ知識人は、ある歴史学者の本に「スバ文化はすでに存在せず、完全にルオに同化された」と書いてあるのを読んで「これは完全に間違っている。作者に抗議する！」と息巻いていた。カレンジン（非バントゥ系民族）出身のモイ大統領に対する反発は、自分たちの文化と言語を飲みこんでしまった非バントゥ民族ルオに対する反発と平行しているように見える。

あるタンザニア側のスバ出身者が「私たちは割礼をするが、ルオはしない。スバとルオは長い間隣人として暮らしてきたが決して結婚しない」と語っていた。タンザニアではルオの影響はケニアより少ないのかもしれない。ケニア側では、ルオとスバの結婚は当たり前になっていて、夫がルオでも妻がルオでも、家庭での言語はスバではなくルオである。こうしてルオ化は進み、言語ばかりでなく、割礼というバントゥの伝統的習慣も60代以下の世代は行なわなくなった。結婚の方式、子供の名前のつけ方（典型的なルオの名前オティエノ〔Otiene〕やオディアンボ〔Odhiambo〕などはごく普通に見られる）、遺体の埋葬方法など、生活のほと

んどがルオ式である。

固有の言葉、名前や慣習も失ってしまったスバ人にとってスバであることの誇りの源、拠り所はどこにあるのだろうか。単に祖先がスバということだけなのか。言語とエスニシティの観点から考えると興味深い。

### むすび：消滅する前に

筆者のスバ語研究はまだその緒についたばかりであり、スバ語の全体像の解明は今後の研究を待たなければならないが、起源から考えると、少数バントゥ語の混成語的性格があるものと見られ、スバ語そのものの構造を記述するとともに、現存する周辺の言語、特にガンダ語やリエニ語との比較研究が重要であろう。現在の話者の年齢と数を考慮すると、スバ語を母語とする世代がいなくなってしまう前に、しっかりとした記述をすることが急務である。

世界の多数の弱小言語が消えつつある中で、スバ語の場合は特殊ではないのかもしれない。たとえ復興運動をおこしたとしても、この流れは変えられないのだろう。しかし、いうまでもなく言語は人間の根幹的な文化財産であり、言語消滅の問題は、自然環境の破壊や動植物の種の絶滅と通底する今日的問題であるという認識に立って、研究を進めていかなければならないと思う。

（みやもと・りつこ／秋田大学教育文化学部）